

近松の里をめざして

「尼崎の自まんと言われてもなんも思いつかへんなあ。」
「わたしも。」

学校の帰り道、ぼくの前を歩きながら、けんたとゆみ子が宿題について話しています。社会科の勉強で、ぼくたちのグループは、尼崎の自まんについて調べることになったからです。いつもなら楽しい帰り道なのに、宿題のせいでちっとも楽しい気分になれません。

「めんどくさいなあ。別に自まんできるところなんてないのに……。」

そんなことを考えていると、ぼくはだんだんはらが立ってきました。するとふり返ったけんたがぼくを見て、

「明日の土曜日は調べに行かなあかんから、家の手伝いはでけへんかもな。」

と言って、にやりとしました。そういえば、明日は庭の草むしりを手伝うことになっています。とっさに「これで草むしりをしなくてすむ」と考えたぼくは、

「そうか。よし、それならなるべく遠くに出かけよう。でもどこがいいか思いつかへんから、帰ってお母さんに聞いてみるわ。」

そう言って、二人と別れました。

土曜日の午後、ぼくたちは「近松の里」をたずねることになりました。お母さんから聞いた「尼崎の自まん」の中で、一番時間がかかりそうな場所を選んだので、思った通り、草むしりはしなくてよいことになりました。

お母さんに書いてもらった地図をもとに、ぼくたちはピクニック気分でバスに乗って出かけました。

近松の里は、近松門左衛門という有名人にちなんで大きな公園や記念館、お寺などがあることはお母さんから聞いたものの、それ以外は何も知りません。車で前を通ったことは何度もありましたが、特に気にしたこともありません。それは、ゆみ子やけんたも同じでした。

公園に着くと、市のボランティアガイドをしているというおじいさんが、他の子どもたちに説明を始めていました。

「ええとこに来たな。君らもいっしょに聞いたら。」

おじいさんが声をかけてくれたので、ぼくたちもいっしょに見学することになりました。

「これが、近松門左衛門のおほかや。近松門左衛門は江戸時代の人で、しばいを書く作家やったんやで。近松の書くしばいは今でもこっつい人気があって、何回もえんじられとるから、日本では知らん人はおらんわ。それどころか、外国でも有名や。」

「日本では知らない人はいない」というおじいさんの言葉に、ぼくはなんだかはずかしくなりました。

「なんで、そんな有名人のおほかがここにあるの？」

ぼくより小さな女の子が、おじいさんにしつ問をしました。

「近松は尼崎が気に入ってな、ここにある廣濟寺といってお寺に部屋を作って、そこでなくなるまでおしばいを書いとったんや。有名な作品がいくつもここでたん生したといっつちやな。」

「知らんかったなあ。」

けんたが感心したように声を上げました。

「そやからこの辺を近松の里と名づけて公園や記念館を建てたんや。」

その後もおじいさんの説明は続き、秋にはここで「近松祭」が行われ、近松の書いた人形じょつるりがえんじらわれていること、また、ぼくのような小学生もその祭りに参加していることなど、今日一日で、ぼくたちはたくさんを知ることができました。

「おかえり、陽一。近松の里、どないやった?」

家に帰ると、げん関でお父さんがむかえてくれました。ぼくは、今日初めて知ったことを、お父さんとお母さんに話しました。

「ボランティアのガイドさんがいてくれてラッキーやったなあ。今度の社会科のじゅ業では、陽一たちがガイドさんになって、いい発表をせなあかね。」

「ここにこしながお母さんが言いました。するとお父さんが、
「今日は大事なことが勉強できたんやな。」

と言ってぼくの頭をやさしくなでてくれました。

夕食のあと、ぼくはさっそく自分の部屋で発表の下書きを始めました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複製して使用することを禁止します。